

+ 5 9 【むてき】

「かいじい、えいゆうのはなしの、つづきだけど、おぼけたいじのえいゆうが、かたっぱしからやられちまうおぼけは、いるんかのう」

懐爺に前にききそびれていたことを、ききました。

「あのね金ちゃん、おぼけにやられちまう英雄なんかいません。おぼけをやっつけるから英雄といわれるんですから」

それはそうだ。

「だば、おぼけたいじさんを、かたっぱしからやっつけちまう、おぼけはいるんかのう」

「いままでの歴史を見てみますとね。おぼけ退治の英雄が一人生まれるためには、百人の犠牲者（ぎせいしゃ）、つまり英雄とよばれなかった者たちがいるんです」

それはしらなんだ。

「ひさんじゃのう。ぎせいしゃをつくる、えいゆうはいらんのう」

「犠牲者をつくるのは英雄ではなくて、おそらく、英雄を希求（ききゅう）する人びとなのでしょう」

懐爺の社会批判がまた始まった、とぼくはうんざりしたものです。

なぜならこどもというものは、批判する（文句をいう）相手は、先生にしろ級友にしろ両親にしろ、かならず目の前にいるものであって、世界とか国とか社会とかは、目の前に見えるものではありませんから。

「かいじいよ、わしがきいとるのは、そういうえいゆうが、ひとりもなかった、つまりその、ぎせいしゃばかりだした、そういうおぼけはいるんかということじゃ」

「わかっています。前置きとしていったまでです。そういうおぼけはいます。【むてき】というおぼけです」

「【きてき】たあ、しゃれとるのう」

「汽笛じゃやりません、無敵です」

「そらあ、てきがないんじゃから、ぎせいしゃもおらんのじゃないかい」

「無敵とは、敵がないという意味ではなく、力の及ぶ相手がいない、向かうところ敵無し、ということです。天下無敵とか、無敵艦隊（むて

きかんたい) とか、きいたことがあるでしょう、あの【むてき】です」
「ようするに、おぼけのせかいで、いちばんつよい、みやもとむさしみ
たいな、まけしらずの、おぼけちゅうことじやな」

「そうです。おぼけの世界の、宮本武蔵です。【むてき】、別名【むさし】
といます」

「ほんまかのう。せんかんむさしは、やられたがのう」

「【むてき】はやられません。だから【むてき】が英雄を生んだことはあ
りません」

懐爺は断固（だんこ）たる口調でいいました。

「ほんまかのう。【むてき】なんておぼけが、いるんかのう」

「なんなら金ちゃん、【むてき】と勝負してみますか」

「しょうぶしたいのう」

ぼくは一発で返答しました。

不安なんかありません。

勝つことが目的ではなく、勝負することが目的なのですから。

「相変わらず金ちゃんは、無鉄砲ですねえ。そういえば【むてっぼう】
というおぼけもいましたねえ」

「【むてっぼう】は、てっぼうさ、もっもらんのだから、よわいおぼけじ
やろなあ」

「いえいえ、武器をもたないで闘うおぼけほど、かぎりなく強いものは
いませんよ」

「よっしゃ、だば、わしはぶきをもたんで、【むてき】としょうぶするぞ」

「いえいえ、何かもっていったほうがよろしいでしょう」

「なにかじゃ、わからん」

「そうですね。【むてき】はくすぐったがりやですから、はたきなんかよ
ろしいですね」

「ほうき、じゃのうて、はたき、かい」

ぼくは首をかしげながらも、はたき一本もって、【むてき】がでるとい
う中川の上流にむかいました。

「おうい、おうい、【むてき】やーい」

ぼくは大声をあげました。

「わしじゃ、きんちゃんじゃ。でてこい、でてこい、【むてき】ちゃーん」

しつこく何度も大声をあげると、中川の上流のさらに奥のほうから、ぼくの声の百倍くらいの大声がきこえます。

「ぼく【むてき】。なにかご用かな」

「たいじにきたんじゃ」

「退治とは、一大事」

「じんじょうに、しょうぶせい」

「ぼく【むてき】。退治されるほど、悪い事したかなあ」

「それは、かいじいに、きいとらん」

「そういうの、冤罪（えんざい）っていうのよ」

「うるさい。おまえは、いちばんつよい、おぼけじゃ。まけたことのない、おぼけじゃ。そういうおぼけは、よほどたいじせにゃならん。してからに、わしがあいてじゃ」

「それは大変。さらばさらば。ぼく【むてき】。逃げるが勝ちよ。すたこらさっさ」

【むてき】の声が、しだいに遠ざかりました。

「にげられちゃった。【むてき】はひきょうものじゃ」

と懐爺にいうと、

「それはちがいます。たしかに【むてき】が英雄をつくらないのは、闘わないからです。【むてき】はひたすら逃げます。【むてき】のすばらしさは、闘うことの虚（むな）しさ無意味（むいみ）さをしてしているところですね」

「そらあ、ぎせいしゃも、つくらんということじゃ。ぎせいしゃつくらんなら、えいゆうもつくらんのは、あたりまえじゃ。わしは、かいじいに、だまされたとおなじじゃ」

懐爺は【むてき】のことをよくしっていたのです。

だからぼくをひとりで行かせたのです。

それにしても、はたきとは、ふざけている。